

# 日本における兎の像 ―野兎から家兎へ―

森 治子

## 1. はじめに

いまからおよそ120年前、兎の大ブームという不思議な現象が世間を騒がせたことがあった。それは日本が近代化を目指して邁進しはじめた明治初期のことで、投機の対象として兎を飼うことが流行した〔注1〕。その流行は凄まじく、各地の待合茶屋などでは兎会という会合が開かれ、様々な兎を集めては品評し、その毛色を競ったという。在来種の野兎にはない愛らしさと物珍しさで、外国産の飼育兎は多くの人々を魅了したのである。兎売買は夢のような高値で取引された。

B. H. チェンバレンは当時の兎の流行について、『日本事物誌』のなかで次のように語っている。「それまで日本には、この小さな齧歯類動物はいなかった。そこで珍しい動物として輸入されると信ぜられぬような値段を生んだ」〔注2〕。

養兎の歴史をたどってみると、家畜の家兎が日本に現われるのは明治より300年ほど遡る、天文年間（1532—1555）のことである〔注3〕。だが日本の家畜史のうえで、家兎の養殖が始まるのは明治以降のことになる。十六世紀当時の日本人はこの小さな愛らしい動物に興味をもつことはなかったのだろうか。中世から近世にかけて日本人が家兎を家畜として繁殖させ、愛玩物として珍重したという話は残されていない。天文年間に持ち込まれた家兎は、なぜ日本で家畜として定着することができなかったのだろうか。新しもの好きで流行に敏感、猫を愛し金魚や鼠などの動物をはじめ朝顔や菊の品種改良はお手のものだった近世の町衆は、新種の兎に注目することがなかったのだろうか。本稿では日本における兎の姿を絵画や工芸品、神話や説話などの物語をもとに、様々な角度から捉えようと試みた。



（図1） 「天寿国曼陀羅繡張」  
中宮寺『日本の文様18動物』 小学館

## 2. 兎の図像の変遷

### 2-a. 仏教の影響を受けた兎から日本的な兎へ

日本最古の兎の文様は、飛鳥時代に制作された「天寿国曼陀羅繡帳」に見られる月の中の兎である〔図1〕。これは推古天皇30年（611）、聖徳太子の亡後、太子の妃の橘大女郎が太子と太子の母后が往生した天寿国の様子を図にするため、采女たちに織らせたものだと伝えられている。これが日本で最初に表された玉兎、つまり月と兎を図案化したものであるといわれている。兎のそばには水瓶と月桂樹の木が配されており、その前で兎は楽しく踊っているように見える。

月と兎の意匠は代表的な兎の文様で、月に兎が住むという伝説に依拠したものである。この伝説はインドから中国を渡って日本にもたらされ、日本では『今昔物語』の中に記されている〔注4〕。内容を簡単に記す。

今は昔、天竺において兎・狐・猿の3匹の獣がともに誠の信心を起こして、菩薩の道を修業していた。そこへ老夫の姿に身をやつした帝釈天がやって来て、3匹の獣に施しを求める。そこで狐は墓小屋に行って、人が供えた餅やまぜ飯、鮑や鰹などのさまざまな魚類を取ってくる。猿は栗や柿、梨、なつめ、みかん、橘などの木の実や瓜や茄子、大豆、あずき、ささげ、粟、稗、黍などを取ってきた。兎は何も収穫がなかったので、火中に自らの身体を投じて供用した。帝釈天はこの兎を哀れんで、その姿を月に移し、あまねく衆生に見せるために、月のなかにとどめ置かれた。



（図2） 「赤漆密陀絵雲忠櫃」  
正倉院『日本の文様24けもの』 光琳社出版



（図4） 「波忠文蛙股」 北野天満宮  
『日本の文様24けもの』 光琳社出版



（図3） 「角倉金欄」 東京国立博物館  
『日本の美術11 名物裂 No.90』 至文堂

月に兎の文様を織り込まれた「天寿国曼陀羅繡帳」は、仏教的な色彩の濃いものであることがわかる。

次に奈良時代のもので、正倉院に残されている「赤漆密陀絵雲兎櫃」〔図2〕に描かれた兎を見よう。肩先に翼をもつ兎が、熱帯樹風の大きな花の木に向かって飛翔しようとしている。これはササン朝ペルシア風の構図の作品であるといわれており、中国との交渉によって西域の様式が伝えられたものだろう。これらの意匠からうかがえるように、古い時代の日本の兎の文様は、その多くが西域からの影響を受けていたと考えられる。

時代は下って、桃山時代に花と兎の文様が中国からもたらされた。角倉金欄である〔図3〕。桃山時代の貿易商人・角倉了以が明国から持ち帰り、愛用したと伝えられるこの裂には、草花の下に後ろを向いてしゃがんでいる兎の姿が段上に右向き・左向きと交互に金糸で織り出されている。その意匠ゆえに花兎金欄とも称されている〔注5〕。

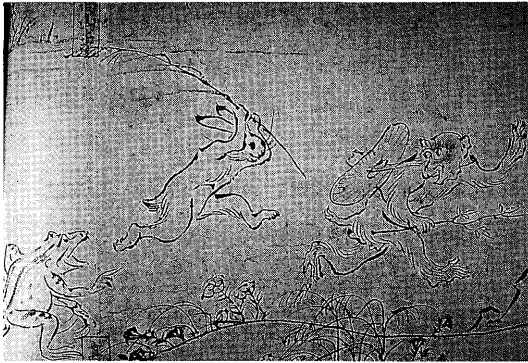
桃山時代も終わりに入ると、日本独自の兎の文様が現れる。それは月と兎の文様に並んで日本でもっとも馴染み深い、波に兎の文様である〔図4〕。波兎の文様は謡曲の『竹生島』を題材に生まれたと考えられている〔注6〕。『竹生島』の「緑樹沈んで魚樹に登る景色あり、月海上に浮んでは兎も波を走るか、おもしろの島の景色や」という一節を写したものだろう〔注7〕。波静かな湖面に月の中の兎が映る情景が目につく。

波の上を跳ねる兎というと「因幡の白兎」を思い出す。鰐の背中を飛び越えて海を渡った兎の姿は、もしかしたら波兎の構図を作りだすきっかけとなったかもしれない。中国ではこのような意匠は見られないので、日本的な創意による意匠だと考えられよう。波兎の文様は時絵や織物、陶磁器や住宅の欄間などに多く用いられ、桃山時代から江戸時代のはじめ頃にかけてたいへん流行したという。日本的な力強さとしなやかさを感じさせるうつくしい意匠である。

## 2－b．写実的な兎の登場

時代を経るにつれて異国的で、宗教的な意味合いの強い兎は姿を消し、日本的で写実的な兎が登場するようになる。平安時代に描かれた『鳥獣戯画』がその代表的なもので、鳥羽僧正筆と伝えられている。この絵巻物は12世紀半ばから13世紀にかけて描かれ、甲・乙・丙・丁と合わせて4巻になるものである。甲巻は動物たちが人間のしぐさを真似て、元気に野原を跳ね遊んでいる姿を描いており、乙巻は動物の生態を描写し、丙巻では動物と人間とが遊び比べている様子、丁巻ではほとんど漫画ともいえるような内容となっている。

『鳥獣戯画』のなかでも動物によって見立てられた人間の遊戯と年中行事を描いた甲巻に兎が多く登場する。この中で兎は猿と一緒に水遊びをしたり、蛙と相撲をとったりと生き生きと遊びまわっている様子が描かれている〔図5〕。甲巻には兎をはじめとして猿、鹿、狐、猪、猫、鼠、貂、雉、蛙など私たち日本人に馴染み深い動物が描かれている。これらの動物は写実が簡潔でありながらその



(図5) 「鳥獣戯画」高山寺  
『新修日本絵巻物全集第四巻鳥獣戯画』 角川書店



(図6) 「南蛮屏風図」 神戸市立博物館  
『近代風俗図譜第十三巻南蛮』 小学館

特徴を巧みに捉えていることから、生きた動物を十分に観察して描いたものであるといわれている [注8]。そのためこの絵巻に描かれた動物は、すべて日本産の動物であると考えられている。

この絵巻のなかで主役ともいえる兎を見ると、毛色は白く耳の先だけが黒い。このことからこの兎は、冬毛の越後兎であると考えられる。越後兎は東北と北陸地方、長野・岐阜両県の北部と山岳地方の山地に生息する野性の兎で、夏毛は褐色だが冬は真っ白に生え変わる [注9]。しかし耳の先端だけは夏も冬も黒いので、この点において白色の家兎と区別することができる。

## 2-c. 家兎の日本移入

桃山時代に描かれた『南蛮屏風図』を見ると、ポルトガル人が持ち込んだめずらしい動物のなかに家兎の姿が認められる [図6]。大航海時代 (15—17世紀)、ポルトガル人は新大陸をはじめとする多くの国や島々に、食用のための家畜の家兎や山羊を送り込んだ [注9]。彼らは航海の途中での食料の補給に供えて、洋上の島々に山羊や家兎を移殖したのだ。兎は長い航海に耐えることができ、容易に野性化し、その繁殖力はすこぶる強いいため、洋上の島々はそのまま食料の貯蔵庫となった。『南蛮屏風図』に見られる籠に入れられた兎はおそらく日本に現れた最初の家畜の家兎で、ポルトガル人の食料として日本に持ち込まれたものだろう。

この家兎の日本移入が日本人の兎観にどのような影響を与えたかを考えてみる。白い毛で赤い目の兎の姿は、古来から動物を飼うことを好んだ日本人には強い印象を与えたのではないだろうか。しかし16世紀の前半に家兎がもたらされてから、その後の家兎の足跡をたどることは難しい。元禄時代に著された『本朝食鑑』に唯一、家兎の飼育についての記述が見られる [注10]。それによると、「当今官家に飼われている小さい白兎は別の一種であり、形状は小さく、大きくはならない。眼および耳の中は甚だ深赤色で、毎に蔬・穀を食べ、能く人に馴れる。尋常の兎は、性が狡くて人



に馴れない」とあり、家兎が貴人の家で飼われることがあったと判断できる。それは野性の兎とは全く別の種類であると考えられていたようだ。家兎は貴重な動物として高貴な人々の間で大切に飼育されていたのだろうか。

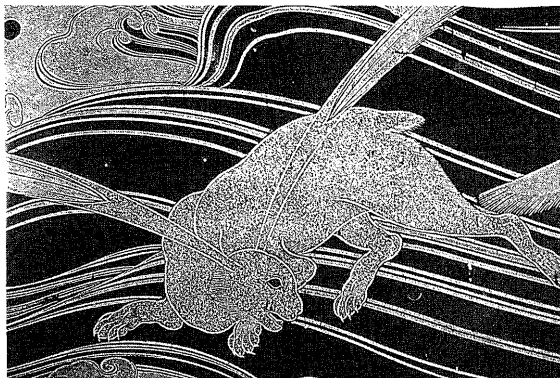
## 2－d．白い兎の登場

工芸品の中に描かれた兎の図像を調べてみると、少しづつ、兎の姿は野性のものから家畜の家兎へと変わっていく。桃山時代から江戸時代初期にかけて兎の文様はかなり好まれたようだが、その頃の兎の意匠は当時の時代背景を映し出すかのように、力強く躍動感に満ちている〔図7〕。野性的な兎の身体は強靱なばねでつくられたかのようにになっている。波を駈ける耳の長い兎の姿は神秘的で不思議な力を感じさせる。飛ぶように早く走り、猟犬の脚もおよばない兎の脚力にあやかうとしたものだろうか、当時は兎の意匠にまでも兎が用いられた〔図8〕。

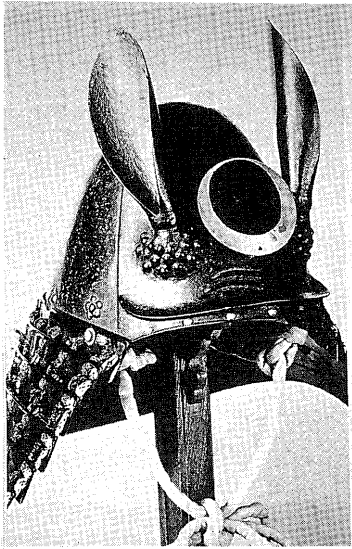
ところが江戸も中期以降になると、兎の表現は可憐さを求めるようになり、野性味の強い兎の表現から柔らかい印象をもつ家兎へと移行してゆく。伝統的な意匠を踏襲するものや庶民的なものなど、さまざまな兎の図柄が現われるが、兎の姿は愛らしい家兎が主流となったようだ〔図9〕。

明治に入ると兎の大流行のおかげで家兎の姿が広く知られるようになる。すると兎の意匠はますます丸く愛らしく、漫画的な意匠も見られるようになる〔図10〕。瀬戸の印判皿を見ると、伝統的な意匠を用いてはいても兎の姿は家兎を写したものであることがわかる〔図11〕。家兎渡来後、約330年の年月をかけてゆるやかに兎の姿は白く可愛らしいものへと作り替えられてきたのだろう。

天文年間に日本にもたらされてから、歴史のうえにはまったくといってよいほど足跡を残さなかった家兎の姿は絵画や工芸品の中に写しとられていた。兎の図像をたどって見ると、江戸中期頃から赤い眼で白い毛の家兎が現れはじめ、徐々に野性の野兎を凌駕してゆく。戦国時代に渡来した白い家兎の話が史実に残されていなくとも、その姿は蒔絵の箱や小袖の文様のなかに封じ込められていた。



（図7） 「波忠蒔絵旅櫛笥」 東京国立博物館  
『日本の文様24けもの』 光琳社出版



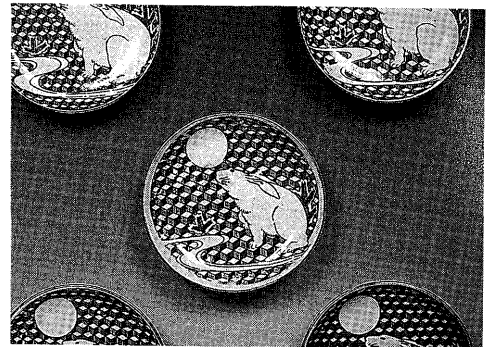
(図8) 「椎実形忠耳兜」 東京国立博物館  
『日本の文様18動物』 小学館



(図9) 「伊万里 染付双忠文大皿」 東京国立博物館  
『日本の文様24けもの』 光琳社出版



(図10) 「印判皿」  
『図変わり印判』 光琳社出版



(図11) 「印判皿」  
『図変わり印判』 光琳社出版

### 3. 兎をめぐる物語 —兎のイメージの移り変り—

天文年間に日本に家兎が持ち込まれてから、兎の大ブームが起こる明治初年までのおよそ330年間、兎をめぐる状況はひっそりとしたものであった。ところが明治に入ると文明開化の幕開けとともに、熱狂的な兎の愛好が始まる。それまでの静けさから一転しての狂乱状態を考えると、家兎の渡来以後、日本人の兎に対するイメージは少しずつ変わってきていて、その蓄積されたものが一気に弾けて兎の大流行という現象が起きたのではないだろうか。

現在私たちが兎を見て感じる印象の多くは、おとなしくて愛らしい動物というものではないだろうか。しかし古くからの兎に対する人間の態度や仕打ちを考えると、そこに愛らしい動物という認

識を読み取ることは難しい。家兎が持ち込まれる以前、日本にいた野性の兎、つまり野兎は農作物を食い荒らし、植林した木の芽を踏み荒らす害獣であった。また逃げ足が早く、なかなか捕まらないことから、敏捷で狡猾な動物だと考えられていた。ではその害獣がどうやって愛らしいという印象を与える生きものとなったのだろうか。嫌な獣から可愛いペットへの変貌。そのきっかけはやはり、おとなしい家兎の登場であろう。今度は日本人の兎観の移り変わりを、よく知られた物語の中から見ていきたい。

### 3-a. 「因幡の白兎」と「かちかち山」——いじめられるものといじめられるものについての考察——

#### 「因幡の白兎」

『古事記』による「因幡の白兎」（『古事記』の表記では「稻羽の素兎」である）の神話を手短かに説明する〔注11〕。隠岐島から因幡の国に渡るため、白兎が鰐を騙して海に並ばせ、その背中を跳ねて海上を渡った。しかし最後のところで兎に欺かれたと知った鰐が怒って兎の皮を剥ぎとってしまう。毛をむしられて赤裸になった兎が海岸に伏していると、八上比賣という美女を得ようと因幡の国にやって来た八十神に、塩水で体を洗って風に吹かれるとよいと教えられる。兎がその通りにすると、今度は塩が乾いて皮膚が裂けて赤剥けになってしまう。痛みを耐えかねて兎が泣いていると、兄神たちに後れて大国主命が現われる。兎から理由を聞いた大国主命は、川の水で体を洗い、川岸に生えている蒲の穂を取って、それを敷いて転がればもとの肌に戻ると教えた。兎がその通りにすると、もとどおりのきれいな体になった。喜んだ兎は大国主命にあなたこそ八上比賣を得られるだろうと予言した。『古事記』には兎と大国主命のエピソードの後に「此稻羽之素兎者也。於今昔謂兎神也」とあり、この兎を神としている〔注12〕。鳥取県の白兎海岸には稻羽の白兎を祀った白兎神社がある〔注13〕。

『古事記』の表記では、白兎は素兎と書かれてしろうさぎと訓読する。これは素裸の着物も何も着ていない兎という意味で、いわゆる白い家兎のことではない。この神話に見られる兎は、鰐を騙す策略家である。しかし海を渡りきるまであと少しというところで兎は喜びのあまり鰐を騙していたと口を滑らし、怒った鰐に復讐される。次に兎は大国主命の兄である八十神に騙され、さらに苦しい思いをする。小さく弱々しく見える兎は、いじめられるものとしては格好の存在だ。犬を使って兎を追いかける兎狩りを考えてみる。じわじわと獲物を追い詰めてゆくその狩猟法は、小さな兎にとってはいたぶられているようなもので、恐ろしさに身もすくむ思いだろう。かわいそうな兎は赤剥けの肌に海水がしみわたり、風に吹かれて焼けつくような痛みをにじいた昔のように、実験動物の主流として薬物に皮膚を溶かされ、眼を潰されて、さまざまな恐怖を味わっている。

#### 「かちかち山」

「かちかち山」は由来を異にする3つのモチーフから成り立っていると考えられる [注14]。その3つのモチーフとは、

- A. 狸が山畑などで爺に捕まる
- B. 狸が婆を殺してこれに化ける
- C. 兎の敵討ち

Aでは爺に捕まえられるほどまぬけな狸が、Bでは極端に悪賢くなって婆を殺し、婆汁を作って爺に食わせる。さらにCになると他愛なく兎に殺される。このように狸の性格が一貫していないため、3つのモチーフを繋ぐ継ぎ目は明らかである。

17世紀後半の成立といわれる赤小本の『むぢなの敵討』においては、「かちかち山」のCを欠くが、時代を下って、18世紀に現れた『兎大手柄』を見ると、Cが加えられている [注15]。Cに見られる兎はしつこいくらいに狸を痛めつけ、最後には殺してしまう。

『聴耳草紙』の中では兎は狸を騙し、いじめ続ける。「兎々、そちや昨日はおれをひどい目に遭わせたな」と狸が言うと、「それは萱山の兎であらう。おれは樺皮山の兎だからそんなことは知らない」と答えて、また別の方法で狸をいじめる。樺皮山の次は笹の葉山、最後は櫓の木山に入り、船を作って狸を誘う。何度も何度も繰り返し狸をいじめるのが話の面白みであるが、まぬけな狸に較べると、兎の残忍さにはなかなかのものがある [注16]。

またこのような兎の悪知恵の部分は他の民話にも見られる。岩手県の雫石村の話では兎は熊をいじめている [注17]。熊の役回りは「かちかち山」の狸と同じでひたすら兎にいじめられる。薪を担いで大火傷を負わされ、火傷によいからと藤蔓を手足に巻いて山を転がり、打ち身に効くからと蓼味噌を塗られて苦しみ、最後には土の船に乘せられて溺れ死んでしまう。この熊は「かちかち山」の狸とは違って何の罪もない。ただただ愚鈍であるというだけで兎にいじめ殺されるのだ。

この話には続きがある。兎は死んだ熊を爺の家を持って行って熊汁をこしらえてひとりで食い、爺には熊の頭の骨を嚙らせて歯抜けにさせる。憎い兎だと爺が捕まえて子供に番をさせるが、またその子供を騙してうまく逃げる、と兎の悪計にはきりが無い。

文化四年(1807)刊行の『本草綱目啓蒙』をみると、兎は「性狡ニシテ、棲トコロノ窟穴ソノ道一ナラズ、獵人一道ヲ薰レバ他道ニ逃去。故ニ戦国策ニ、狡兎有三窟、僅得免其死耳トイウ」と記されており [注18]、古くから兎が狡知な動物と考えられていたのは明らかである。「かちかち山」の中でも本来兎は悪者として語られていた。それが18世紀に現れた『兎大手柄』では悪者の狸を懲らしめる、正義の味方になってしまう。それ以降の「かちかち山」の兎には愛らしさが加えられ、性格も狡知であるというより聡明であるという風に変わる。

大正6年(1917)、武者小路実篤による「カチカチ山」の兎は、親切で礼儀正しく義侠心に富ん

だ性格をもつ [注19]。これ以後の兎物語は、兎に愛らしさや勇気といったものを与えるようになる。新しい「かちかち山」の兎像には、白色で赤い眼をもつ家兎の姿が重ねられているのではないだろうか。白い毛色の清らかさ、柔らかくやさしい感触。野兎とはまったく違う穏やかな性質をもつ家兎の登場によって、狡くて悪知恵の働く兎の姿は消滅し、いつのまにか賢くて可愛いお手柄ものになってしまった。

### 3-1-b. 兎、子供の友達になる

明治以降、白い兎は広く親しまれるようになる。それは明治から大正にかけて作られた童話や唱歌に、兎のことを歌ったものが多く見られることからもうかがえる。

明治時代には「うさぎ」、「うさぎとかめ」、「大こくさま」といった昔話や神話を題材としたものが小学校の唱歌として作られている。大正時代に入ると、「故郷」のような尋常小学校唱歌のほかにも、「あわて床屋」（北原白秋）、「兎の電報」（北原白秋）、「兎のダンス」（野口雨情）など、『赤い鳥』や『コドモノクニ』などの子供向けの絵本に載せられた童謡が増える [注20]。歌の内容も「兎のダンス」などは、兎を子供に見立てて歌ったもので、無邪気で可愛らしいものが多い。与田準一によると大正期の童謡は「総体的に、子供の無邪気さ、楽しさ、優しさ、清らかさなどを、その内面からうたいあげたもの」であり [注21]、そのため歌のなかに描かれた兎像も愉快で愛らしい。その姿は白くてぱっちりした赤い眼をもつ、家兎そのものではないだろうか。

現代では多くの幼稚園や小学校で兎を飼育しているので、小さい世代には兎の人気は根強い。小学校での兎の飼育は大正時代から始まっており、農家の副業に対する知識を養う目的で、兎や鶏、蜜蜂などを飼育していた [注22]。大正時代には家庭の副業として養兎や養蜂が奨励されており、さまざまな手引書が出版されていた。大正7年刊の『兎と蜜蜂』を見ると、「兎と蜜蜂！お伽話にでも出て来さうな、可憐な主人公を捉え来って、小さいながらも、家畜的用途に該当させやうとする」と書かれており、養兎が手ごろな副業であったことがわかる [注23]。また兎はお伽話の主人公としても十分認められており、夢のある可憐な動物という認識が広まっていたようだ。

時代は少し下るが、当時の子供の意識を映し出す漫画に、兎を主人公とする『凸凹黒兵衛』がある [図12]。これは人気漫画家の田川水泡が「婦人倶楽部」の別冊付録として、昭和8年5月号から絵本サイズの大判で連載を開始したものである。

黒兵衛はミッキー・マウスとミニ・マウスが対であるように、白兎の白ちゃんといつも仲良しである。田川水泡は黒兵衛を箱の中の飼い兎とは違って、「のびのびと愉快に楽しく人間と同じような生活をさせてやりたい」と言っているように [注24]、黒兵衛は白ちゃんと一緒に月の世界や海底や地獄の世界など、さまざまな場所に出かけてゆく。黒兵衛は人間の子供とも仲良しだ。

野口雨情作詞の「黒兵衛の歌」という歌がある [注25]。（「黒兵衛の歌」は「おててつないで」の曲に合わせて歌うことができる。）

凸凹黒兵衛は お色が黒い  
親は白いが 黒兵衛だけは  
親もあきれた 黒兎

お色黒いが お利口な兎  
そして無邪気で かわいい兎  
いつも黒兵衛は 人気者

いくど石鹸で 洗って見ても  
黒くなるとも 白くはならぬ  
黒いお色は 生れつき

いくらみんなが 怒っていても  
凸凹黒兵衛が 出て来たならば  
すぐに にこにこ 笑い出す

長いお耳も 真黒黒で  
白いところは くりくりお目目  
どこへ行っても すぐわかる

笑うたんびに 仲よくなって  
凸凹黒兵衛は 兎だけれど  
とても愉快な お友達



(図12) 「凸凹黒兵衛」  
『別冊太陽 子どもの昭和史』 平凡社

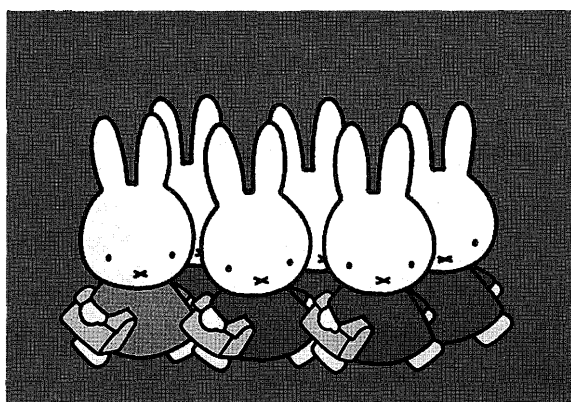
凸凹黒兵衛の歌詞を見ると、黒兵衛が愛すべき人気者であることがわかる。ここでは兎という動物が、無邪気であどけないものだという印象を与える。大正時代以降に作られた童謡に現れる兎も子供らしい無邪気さと愛らしさをそなえている。たとえ兎がいたずら者であっても、それは悪意のない子供の無邪気さの表れである。残酷で性格の悪い兎というイメージはもはや消失している。初期「かちかち山」の、ただただ残酷な兎とはもう違う。ここにきて兎は動物のなかでも特に子供の無垢な心や純真さ、無邪気さを表す象徴となり、「可愛い子供のお友達」という役割を獲得した。

#### 4. おわりに

私たちは、ふわふわした柔らかいものを見るとつい手をのばして触わりたくなる。赤ちゃんのむくむくとした手足や頬っぺた、子猫の背中やクマのぬいぐるみ。兎の丸みの柔かさはとても魅力的だ。現代の日本人が兎に対して感じる印象は、ふわふわと柔らかい動物、また可愛くておとなしくて、世話が楽で扱い易い動物というものではないだろうか。そこが兎の魅力ではある。しかしそれは飼い慣らされた白い家兎の印象であって、野性の兎のものではない。家兎が出現する以前、日本には野性の兎しかいなかった。野兎は農作物を食い荒す害獣であった。それが近代に入ると、森の獣から身近な可愛い動物へと変わってくる。そのような意識の転換が起こるきっかけは、家兎の日本移入であると考えられる。家兎がやってきてから、日本人の兎に対する意識は徐々に作り替えられ、そうして明治以後の近代社会において、愛らしい動物という兎のイメージが定着した。

現代の日本はペット・ブームということで、めずらしく高価な動物が限りなく入ってくる。当然兎の人気はいまひとつで、どうしても古くさくてつまらない動物だという印象は拭えない。しかしおとなしくて手のかからない兎は今だに幼稚園や小学校で飼育されているし、動物園のこども牧場などでの兎の人気は高い。子供にとって、兎はぬいぐるみや漫画のキャラクターとして親しみやすい存在である。実際銀行のキャラクターや製薬会社のマスコットとして、多くの兎が活躍している[注26]。

ディック・ブルーナというオランダのイラストレーターが、子供向けの絵本に描いたうさこちゃんというキャラクターがある[図13]。図形のように単純な線とはっきりした色使いがブルーナの



(図13) ディック・ブルーナ  
「うさこちゃん」絵ハガキ

絵の特徴で、そのキャラクターの多くは平面的で動きが少ない。なかでも特にうさこちゃんはぺったりと無表情だ。現在テレビのアニメーションで見られるうさこちゃんも相変わらず無表情で淡々

と歩いている。静かなうさこちゃんはどこか遠い森の中、棄てられたぬいぐるみが集まる森の中に住んでいるうさぎのおんなの子のようだ。あまりにも無表情すぎるため、かえってうさこちゃんには喜びや悲しみ、怒りや痛みといったさまざまな感情が隠されているように感じられる。うさこちゃんを可愛いというのには無理がある。可愛さのあまり手放せないというよりも、痛々しいまでのうさこちゃんの静けさに抱きしめたくなるといった感じだ。静かなうさこちゃんのたたずまいは私たちを心細くさせる。

実際家畜の兎は表情に乏しい。そのなかには野性など残っていないように思われるが、実はとてもきつい性格をもっていることが知られている。最近では学校の兎が惨殺されるというニュースを耳にすることがある。しかし兎は怯えてじっとしているだけの無抵抗な動物ではない。追い詰められると耳障りな声を上げて鳴き喚き、人を蹴飛ばして逃げることもできるのだ。無垢で無害だと思われる兎の野性は丸くてしなやかな体のなかに秘められている。郷愁という使い古されたイメージを負い、学校の兎小屋の中で忘れ去られようとしている兎。しかし兎の人気は静かに揺り返し、緩やかではあるが、兎のファンは増加している。既存の愛らしさとは違う魅力をもつうさこちゃんの誕生が兎物語の第三の幕開けとなるのではないだろうか。

#### 本文引用文献および参考文献

[注1] 石井研堂 「明治事物起原」 『明治文化全集別巻 明治事物起原』1993 日本評論社 1453p.

「養兎賣買の流行は、一時其勢甚盛にして、百餘種の錦絵さへ發行され、之に携わりて暴富するものあり、産を傾くる者あり、満都の經濟界を攪乱したり」

斎藤月岑 「武江年表2」 金子光晴校注 東洋文庫118 1968 平凡社 249p.

明治五年七月に「比の頃より始まりて、兎を弄ぶ人多し。高価を以て購ひ勝劣を争ふ輩あり(所々会合を催す)」

明治期における兎の流行については鍋木清方著『明治の東京』(1989岩波文庫)や『風俗画報』等に詳しい。

[注2] B. H. チェンバレン 『日本事物誌1』 高梨健吉訳 東洋文庫147 1969 平凡社 p. 204

[注3] 宮地伝三郎 『十二支動物誌』 1988 ちくま文庫 57p.

「ポルトガルの航海者たちが食用として世界各地にひろめたのが、家畜のウサギのはじまりとされている。日本へ持ちこんだのはオランダ人で、一六世紀の中ごろ一天文年間である。」

下店静市・宗政五十緒・河原正彦 『日本の文様24けもの』 光琳社出版  
1974 18p.

「ちなみに、兎がわが国にもたらされたのは天文年間、オランダ人によってであるといわれている」



以上の文献の記述のように家兎を日本に持ち込んだのはオランダ人で、天文年間(1532—1555)のことであったというのが定説になっている。しかし日本がオランダと貿易を開始するのは1609年、オランダ船が平戸に入港し、商館を設置した年になる。それより半世紀も遡る天文年間にオランダ人が日本にやってきたという史実はない。桃山時代に描かれた『南蛮屏風図』を見ると、ポルトガル人がもたらした異国の珍しい動物のなかに家兎の姿がある。ポルトガル人は大航海時代、新大陸をはじめとする多くの島や国に食用の家兎を送り込んだ。天文年間に日本に入ってきたのはポルトガル人である。従って日本最初の家兎をもたらしたのはポルトガル人だったと考える方が妥当である。

[注4] 「三獣菩薩道、兎焼身話」 『今昔物語』巻第五の十三 山田孝雄校注

日本古典文学体系 岩波書店 1962 岩波書店 365～367p.

「月の兎」の直接の出典は、原英『大唐西域記』巻七「婆羅痾斯国」条にある「兎王本生譚」であるが、それを遡るとインド説話の『ジャータカ』三一六話「兎前生物話」に行き着く。

[注5] 中江克己編 『染色事典』 1987 240p.

[注6] 香取忠彦「兎の文様—飛鳥奈良時代を中心に—」『日本の文様18 動物』1989 小学館 157p.

[注7] 梅若六郎 「竹生島」 『梅若謡曲教本 第三巻』 1984 能楽書林

南方熊楠「兎に関する民俗と伝説」『十二支考』南方熊楠全集第一巻1971 平凡社 70p.  
熊楠はこの一節について、『南畝莠言』上によると兼長寺広徳庵に住した僧の自休が竹生島を題として詠んだ詩の五、六の句の「緑樹影沈んで魚は樹に上り、清波月落ちて兎は流れに弄る」を作り替えたものと記している。

下店静市・宗政五十緒・河原正彦 『日本の文様24 けもの』 光琳社出版 1974 19p.

「波兎の意匠の出典は、謡曲「竹生島」であろう」

[注8] 今泉吉典 「鳥獣戯画の動物」 『新修 日本絵巻物全集第四巻 鳥獣戯画』角川書店 1976 29p.

「第一巻の動物画は、筆者が直接、身近に棲息する動物を観察して描いたものに違いない。」

[注9] 今泉吉典 「鳥獣戯画の動物」 『新修 日本絵巻物全集第四巻 鳥獣戯画』角川書店 1976 29p.

室井綽 『動物の観察』 カラーブックス555 1981 保育社 12～14p.

日本に生存する野兎はエゾナキウサギ、エゾウサギ、トウホクノウサギ、キュウシュウノウサギ、アマミノクロウサギである。

[注10] 加茂儀一 『家畜文化史』 1973 法政大学出版局 908～911p.

[注11] 人見必大 『本朝食鏡5』 島田勇雄訳注 東洋文庫395 1981 平凡社 310p.

[注12] 『古事記祝詞』 倉野憲司・武田祐吉校注 日本古典文学体系1 1958 岩波書店 90～93p.

[注13] 前掲 『古事記祝詞』 92p.

[注14] 加藤恵 『神話のふるさと』 カラーブックス143 1968 保育社 36～37p.

- [注15] 「昔話と文学」 『定本柳田国男集 第六巻』 1968 筑摩書房 234～247 p.
- [注16] 中村禎里 『狸とその世界』 朝日選書400 1990 朝日新聞社 10～30 p.
- [注17] 佐々木喜善 『聞耳草紙』 1931 三元社
- [注18] 小野蘭山 『本草綱目啓蒙 4』 東洋文庫552 1992 平凡社 87 p.
- [注19] 前掲 柳田 244～245 p.
- [注20] 武者小路実篤 『カチカチ山と花咲爺』 1917  
名著復刻日本児童文学館第一集 1975 ほるぷ出版
- [注21] 堀内敬三・井上武士編 『日本唱歌集』 1958 岩波文庫  
与田準一編 『日本童謡集』 1957 岩波文庫
- [注22] 前掲 『日本童謡集』 295 p.
- [注23] 前掲 得能 61 p.
- [注24] 久保健彦 『子安叢書第七編 兎と蜜蜂』 1918 子安農園発行
- [注25] 田川水泡 『凸凹黒兵衛』 1934 大日本雄辯会 まえがき（ページ表記無し）
- [注26] 前掲 田川
- [注27] エスエス製薬では昭和27年から兎をキャラクターに使いはじめた。その  
名前はぴょんちゃん。あさひ銀行ではディック・ブルーナのうさこちゃんをキャラクターとして用  
いているし、野村証券のMMFの94年度のキャラクターも兎である。筆者の通っている歯科医院の  
マークは歯ブラシを持った兎である。兎のキャラクターとしての使用度はかなり高い。

#### [図版] の出典

- [図1] 「天寿国曼陀羅繡帳」 中宮寺 『日本の文様18 動物』 小学館
- [図2] 「赤漆密陀絵雲兎櫃」 正倉院 『日本の文様24 けもの』 光琳社出版
- [図3] 「角倉金襴」 東京国立博物館 『日本の美術11 名物裂 No.90』 至文堂
- [図4] 「波兎文蛙股」 北野天満宮 『日本の文様24 けもの』 光琳社出版
- [図5] 「鳥獣戯画」 高山寺 『新修 日本絵巻物全集第四巻 鳥獣戯画』 角川書店
- [図6] 「南蛮屏風図」 神戸市立博物館 『近世風俗図譜第十三巻 南蛮』 小学館
- [図7] 「波兎蒔絵旅櫛笥」 東京国立博物館 『日本の文様24 けもの』 光琳社出版
- [図8] 「椎実形兎耳兜」 東京国立博物館 『日本の文様18 動物』 小学館
- [図9] 「伊万里 染付双兎文大皿」 東京国立博物館 『日本の文様24 けもの』 光琳社出版
- [図10] 「印判皿」 『図変わり印判』 光琳社出版
- [図11] 「印判皿」 『図変わり印判』 光琳社出版
- [図12] 「凸凹黒兵衛」 『別冊太陽 子どもの昭和史』 平凡社
- [図13] 「うさこちゃん」 ディック・ブルーナ 絵はがきより